

研究実践報告

新型コロナウイルスの下での大学キャンパスにおける 「野外活動」の実践と課題

杉 山 浩 之*

Practices and Tasks of the “Outdoor Activities” in the
University Campus under the Covid 19 Situation

Hiroyuki SUGIYAMA*

はじめに

なぜ本学では野外活動が学科卒業の授業として行われているのか。まずそこから自分なりに考えてみたい。私が本学に赴任した1997年には前身の初等教育学科の学科必修科目として教育課程に組み込まれていた。当時は、2泊3日のテントを設営する本格的な野外活動、宿営キャンプ型であった。夜中に集中豪雨的な雨が降り、飛び起きてテントの周囲をスコップで水を作り、難を逃れたのが1年目の野外活動であった。最も記憶に残った一場面である。それよりも前の野外活動では、水や食料、テントなど必要な物資すべてを担ぎ、野営場まで歩いていくという今日の野外活動では想像もできないものであったらしい。また、野外活動は通称「海キャン」と「山キャン」の二つの活動がある時代もあった、3泊4日で、それぞれ海と山で行われてきた。午前午後2時間ずつ海の中で泳ぐ、そして合宿形式で登板が調理室で皆の食事を作る「海キャン」。最終日は30分の遠泳が待っている。達成感で感動して涙を流す学生もいた。浜辺で

ビーチバレー大会もあった。もう一つの「山キャン」は、野外炊飯、登山（最近はイメージを変えてトレッキングという言い方をしてきた）、自然探索と芸術表現活動、ネイチャーゲームなどが行われる。7食すべてを自炊するから山キャンといえば、野外炊飯というイメージが強く、体力的にハードな登山があった。7回も作っていると確かに野外炊飯を学び、一定の基礎的技能は身につくが、もともと持っていた経験知や技能の個人差があるので、活動にも差が生まれ、学修成果も多様である。登山は足腰が鍛えられていない学生にはイメージは良くないかもしれない。しかし、新たな自然体験によって新たな境地が開かれることが期待される。果たして学生の最善の利益が保証されていたであろうか。答えに窮する。学生に主体性に比例して利益は多様に変化する。いやいや従って単位のために参加し、良いものを掴み切れずに終わって卒業していった学生も少なくないであろう。教育活動においては「楽しむ」ということは教育成果の重要なファクターである。主体的に一生懸命に取り組んでいれば何かが見えてくる。あとから振り返ってみて「山キャン、懐かしいなあ」と何年もたって思い出し、もしかし

* 本学教授

たら意味を新たに発見することも一つの教育成果である。学校教育の範囲では、即時的な効果しか測っていないので、複名的な、それなりの限界がある。

教育活動としての「野外活動」の意義には「そこに山があるから登るんだ」という面は全くないとは言いきれないが、もっと人間として生物として本質的なものがある。人間は自然体験によって進化してきた数百万年の歴史を持つ。ラスコーの壁画は堂々たる芸術表現活動である。自然界の火を手に入れ、身を守り、食を豊かにしてきた。人工的なマッチを使うということはあるが、自然を利用して火をおこし、薪を燃やし、調理をする活動は生きる力の土台になるものともいえる。火を見つめていると本能的な何か刺激される。癒されるということは生物として失っていた何かをとりもどすということである。大自然の中で光や暗闇を感じ、雨や風を体験し、夜空の星を眺め、宇宙の広大さに思いをはせる。キャンプファイヤーの炎をじっと見つめて何かを感じたり考えたりする。時には雷や強風に吹かれた樹木のざわめきに耳を澄ます。人類は長い間にわたり、生きていくためにあらゆる自然を生活に取り入れてきた。そのDNAは誰もが持っている。しかし、今日では十分に目覚めないでその能力を最大限に発揮しないままにいても人間は人工的なものも究極的には自然から生産している。

本学の「野外活動」の最大といってもよい大きな特徴の一つは、学生が実行委員会を組織し、このリーダーたちが野外活動の運営を担うという学修方法である。実行委員は前年度の12月に立候補で決める。そして、春休みから準備に入り、数日間研修を行う。3月か4月に下見を兼ねて現地研修を一泊で行う。県民の森で行って

いた時代は、キャンプ場を利用しており、日帰りで行っていたが、国立青少年自然の家を利用するようになってからは一二日の日程で下見を十分に行うようにしている。実行委員の選出に先立ち、野外活動のねらいや主な活動、実行委員の役割と班組織など運営組織について全体への説明を行い、第1回のオリエンテーションとしている。授業担当者と実行委員は、前年度の活動と反省点を共有し、要綱(しおり)の作成に向けて、上のような準備を進める。下見の後は、実行委員を中心にして事前学習を3回ほど行い、各班が担当する活動を決め、班の中の役割を決め、活動の指導計画を立てる。以上、簡潔に「野外活動」の経緯と現状を述べ、なぜ本学で野外活動が卒業必修科目として設置されているかを考えた。要するに、生きる力の中心ともいべき野外における自然体験活動を指導できる教員の養成ということである。これは教育職員免許法で規定されている教職課程には野外活動は必修科目としては規定されておらず、近隣の大学においても野外活動を必修として設定している大学はまれである。そう意味においても本学における野外活動は特異なケースと言えるし、また本学における教育活動の特徴の一つである。これまでの伝統を継承させ、時代にマッチした野外活動へと進化させていく必要もあると思う次第である。次に、2020年度および21年度の野外活動の実施内容と課題について述べる。

本論 2020および21年度の「野外活動」の実践と課題

(1) 授業計画と実施内容

2020年度の野外活動の計画では、これまで上に述べたような野外活動を続けてきたが、コロナ禍のもとで、2020年度は、これまでの「野外

活動」とは大きな変更をせざるを得ないものとなった。21年度も同様に学内で実施した。21年度のプログラムは、薪割を取りやめ、キャンプファイヤーを取り入れたことが大きな違いであった。また、20年度は春休みの3月8・9・11・12日に実施、21年度は4月から、水4・5コマ、土曜日などで実施したが、最終的には11月上旬に終了した。

まず授業の組み立てにおいて、コロナ禍の下で貸し切りバスによる移動と宿泊施設での宿泊活動が行えないということで、学内において通学により行う活動を授業担当者中心に組み立てた。また、160人以上が一斉に活動を行うことも3密を避けるということからも困難であるので、大きく2クラスに分ける案を考えた。そして、活動ⅠⅡを一日目の午後に行う7班（42人）と活動Ⅲを初日の午後に行う7班（42人）と更に半分にした。後半の二日間はもう一つのクラスの約80人が同じ形式で活動した。21年度は、すべての活動は1クラス80人体制で実施した。オリエンテーションに続く活動では、以下の通りである。ただし、21年度は、導入でレクリエーションを取り入れ、アイスブレイクを実施した。

活動Ⅰ 自然散策と芸術表現活動

根の谷川の土手を歩いて春を見つけ、それを絵にするという活動であったが、3月上旬はまだ春が来ていなくて、土手も春の訪れは未だであった。それでも学生たちは春の訪れの兆候を探って絵を描いていた。21年度は、4月に実施し、学内キャンパスを中心に、フィールドビンゴカードを作成して、春を散策した。5月は集団活動が困難になり、個人で実践することになった。

活動Ⅱ コナラ板に「自分の将来」を描く活動

学生一人ひとりが計画書を作成し、班の中で共有して一つの班の計画書を立てた。計画書は、ねらい、材料、導入、展開、結末のワークシートを作成した。各班の6人は班活動として協力しながら、活動の担当と副担当が進めていった。制作の後に班内で発表し交流した。この活動は、コナラ板（10 cm 程度の輪切り板で年輪がある）を使用する室内の活動である。

活動Ⅲ 薪割と釜戸火焚き活動（班別）

薪割の模範を見せて、安全に行う留意点を特に強調して実施した。怪我は全くなく、薪割を初めてする学生が殆どあり、感激の声が聞けた。21年度は実施しなかった。

火焚きは、風の強さが丁度よく、飯盒の水を沸騰させて完了とした。21年度は、薪は最後の炭になるまで燃やすことで完了とした。火焚きは風の強さも影響を受けるが、両年度とも適度な風が吹き、好天の中で実施した。駐輪場の屋根付きで雨天でも可能であったが、雨は降らなかった。

活動Ⅳ キャンプファイヤー実施（60分、儀式とレク：ジェスチャーゲーム）

20年度は、キャンプファイヤーは講義のみとしたが、21年度は1クラス単位で実施した。火の神が登場した儀式を行い、班別のジェスチャーゲームでレクを行った。

これまでのように、教員と実行委員で準備を行い、実行委員が活動毎に司会をして運営を進めていった。実行委員は同じ活動を二回するので、1回目の反省を生かし、2回目は運営がスムーズに流れるという具合であった。毎回、1時間程度の振返りを行って次回に備えて行った。実行委員は交代して皆が同じように運営を担

るようにした。2年間、学内での野外保育を実践することで教員側にとっても繰り返しの中で反省と改善点の整理をすることで指導体制も何とか様になってきた。22年度の野外活動はどのような内容になるかは未定であるが、3年目に備えて最後に次年度に向けての課題を整理しておきたい。

(2) 振返りと今後に向けての課題

1) 班活動

密を避けての活動をしなくてはならない。班活動もお互いに距離をとって活動する。学内でのサークルや公私における仲間活動が出来ない中で1年が過ぎていく。ゆえに例年よりも人間関係の深まりが出来ていない学年で、20年度は特に事前学習は個人中心でオンラインでの意見交換が行われた程度などと人間関係が十分に出来ていない班活動を行わないといけなかった。今後も積極的に声を掛け合う必要がある。すぐのできる学生もいるが、できない学生もいる。積極的なリーダーがいる班は動きが大きい、大人しめの班もあった。活動ⅠⅡは個人でも活動出来ることである。しかし、個人の活動に相互の交流が入るとお互いの学びあい生まれる。いろんな自然鑑賞や表現の仕方があることを知り、自分らしさを知ると同時に、仲間の個性を知ること、同じ志を持つ同級生への興味が出てくる。そうした班活動の良さを最大限に生かす指導が必要となる。実行委員から班組織への働きかけを一層積極的に行う必要がある。22年度は、21年度12月に決定した26人の実行委員が予定されているので、班担当という新たな役割も考えてみたい。

2) 自然体験活動

従来の野外活動と比べて、決して自然豊かな環境ではない日常の空間で限られた自然体験し

かできないミニマムな野外活動である。3月前半という未だ動植物が未だ動き出していない冬の終わりや春の始まりの時期であった。21年度は、4月から5月で時期的にはちょうど良いものとなった。決して豊かな自然があるとは言えない文教のキャンパスでは、周辺も含め、時期の設定も課題である。

3) 薪割と釜戸火焚き活動

20年度は3月の実施であり、時期的には良かったが、21年度は、9月の実施が心配であった。しかし、新型コロナの感染で9月は緊急事態宣言中となり、結果的には11月の気候的には恵まれた中での実施となった。薪割は、安全確保が困難であり、そのための十分な時間も要するので、21年度は断念したが、今後は取り組みたいと思う。釜戸作りと火焚きについては課題は、湯を沸かすことだけに留まったということで薪のエネルギーを湯を沸かすとはいえ湯は捨てるので、エネルギーは空中に放出されただけである。学生の火焚きの体験活動としての意味はあるのだが、薪の活用法としては課題が二年連続して残った。

4) キャンプファイヤー

20年度は講義としたが、21年度は、グラウンドで日没前の4時半スタートで5時半終了の活動となった。11月の日没は5時15分ごろであった。ファイヤーの薪の組み立てやトーチ、灯油の準備などは、これまでの経験知から安全性を確認し、実施した。トーチの点火はリハを行った。コロナの下で合唱訓練が不十分であり、歌が響かなかつたが、点火儀式や儀式的セリフは実行委員によるもので上出来であった。時間的にも予想通りの60分で殆どの薪が燃える程度となった。ジェスチャーゲームは教員が参加となったが、一長一短で学生が教員にお任せする動きも出ていた。事前に教員にお知らせしておくこと

が出来ていなかったのではないだろうか。ジェスチャーゲームを練習する時間の確保も困難であったことも課題であった。

おわりに

野外活動は、三つの目標達成（ねらい）を持っている。野外活動の基礎的な知識技能を身につける。集団活動を行うことにより問題解決力を養う。自然を保護する心を養うである。これらのねらいが達成できる活動プログラムの2年間を振り返った。

ところで、新型コロナ（Covid-19）による感染は変異型が次から次にと国境を越えて広がっている。ワクチン接種は進んでいるが、変異型が現れて、半年を過ぎると効き目が減少している、変異型には効き目がないなどというニュースが流れてくる中で、教育課程の中で実施する集団の教育活動は形を変えざるを得ない状況になっている。学校における様々な行事の中には、形骸化していたり、教育活動本来の在り方から

課題があつたりするものもあるが、本学の野外活動は、はじめににおいても述べたように、学科行事として位置づき、学年の団結力や問題解決力を育む活動として、教員養成の教育活動として一翼を担ってきた。その歴史を振り返ると、宿泊活動と比べ、学内演習の教育効果は未だ十分なものに至っていない。試行錯誤の手探り状態を脱しきれていない。まだまだ改善の余地は大きい。今後も討議を重ね、計画を立て、実行委員を中心とした学生全員による主体的な授業参加の運営を心掛けて行きたい。

参考文献

- ①杉山浩之、高橋泰道、「野外活動の実践と課題」、『広島文教教育』(No. 28) 2017年。
- ②C. プレイジ著、西浦和樹監訳、『北欧スウェーデン発、科学する心を育てるアウトドア活動事例集』、北王路書房、2019年。
- ③青少年の野外教育の振興に関する調査研究者会議、「青少年と野外教育」、文科省 HP（生涯学習局、青少年教育課）閲覧日（2022年1月7日）